ふるさと再発見

横輪町桂林寺の石垣

火打石の名工 安蔵が築造

サニーロードの横輪口から横輪町の里中に入ると、周囲の視界は石垣で重なりあっている。民家の屋敷も畑も田もすべて石垣で築き上げられている。この峡谷の山村において生活手段として平地を確保するには、石垣は当然の手段だったであろう。なかでも、ひときわ目を引くのは里の北側の台地に築かれた、風格のある壮大な桂林寺の石垣である。

石材にはこの付近で得られる赤石も多く見られるので、横輪町付近の山間や横輪川の渓谷から得た石が用いられたと思われる。大小さまざまな形の石を、バランスよく美しく組み合わせて、強度を保っている技術は見事である。

正面と袖の部分を含む長さはおよそ五十㍍、高さ約三㍍のこの石垣は、伊勢市内において最大規模のものであろう。寺に残されている「弘化山桂林寺記録」＝嘉永五（一八五二）年写・文久元（一八六一）年改訂＝によれば、八代法雲上人の時、嘉永元（一八四八）年と同七（一八五四）年の二回にわたり、小川谷火打石邑（現度会町火打石）住の石工安蔵（安造とも）が人夫一千三百余人（延べ人数）を投じて築いたことが記されている。見事な石垣の落成に上人もさぞかし心打たれたのであろうか、自らも鑿（のみ）をとって石垣の石に「嘉永甲寅八月落之貽千遐代云 現住誌弁鐫」と刻んだことが記されている。石垣の中央、上がり口の正面の石に、この紀年銘を見ることができる。

横輪町桂林寺の石垣。昔はこの上に土塀がめぐらされていたが現在はコンクリート構造の塀に改修されている

本寺の尼子正道老僧夫人によれば「火打石の若い石大工が、大勢の人夫を手際よく指揮して築いたと、先々代からの昔話として聞いている」とのことである。

過日、度会町の友人岡谷昌行氏に案内していただき、火打石の故服部正夫氏宅を訪ねた。和子夫人（七六）にご先祖のことを伺（うかが）ってみると、曾祖父の兄弟に安蔵という石積みをする人が居たと、祖母らから聞いており、安蔵の名が刻まれた瓦が残っていたという。向かいの家の服部英夫氏によれば、「安蔵は波切灯台の石積み等もしたと古老から聞いている」と教えてくれた。幕末から明治にかけて、火打石の安蔵は、石積みの名手として南勢志摩地方で活躍した石大工であったと考えられる。

桂林寺の記録では、石積みが完了した嘉永七（安政元）年十一月四日五つ時（午前八時ごろ）大地震（安政の大地震）あり、海浜は津波、山田は宮後ほか各町で町屋倒壊。当山は無事なるも井戸水が涸渇（こかつ）したので火打石村安造（安蔵と同一人と思われる）に井戸を一丈余掘らせた旨が記されており、安蔵の万能ぶりがうかがえる。

安蔵も桂林寺の石垣には得心したのであろうか、東側袖垣の上部の石に「石工安造」の銘を自ら刻んでいる。紀年銘や作者の名が刻まれている江戸時代末期の石垣は、この地方では他に聞いたことがない。

（浜口主一＝伊勢郷土会代表幹事・伊勢市）

上がり口の正面の右に刻まれた法雲上人の紀年銘

袖垣に刻まれた「石工安造」の銘